
草原の歌に花言葉を

かがみ豆腐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原の歌に花言葉を

【Zコード】

Z6273W

【作者名】

かがみ豆腐

【あらすじ】

自らの意思により、奴隸としての環境から逃げ出すことに成功したカルル。彼は王都を目指して草原を渡ろうとするが、その途中で狼に襲われてしまう。

そんな窮地に現れて救つてくれた者が居た。騎士はアカシアと名乗る、王都の追つ手から逃れるために荷馬車を貸してほしいとカルルに懇願する。

助けられた礼と、さらに幼き日の再会に感激したカルルはそれに快諾するが、それはつまり逃げ出してきた村をもう一度通りかかると

いう意味でもあった。

しかし引き返してきたカルルたちが目にしたのは、焼け跡と化したかつての村だった……。

序章（前書き）

だれだって幸せになりたいのです。奴隸も、英雄も。

そのために逃げて、時には戦います。

それぞれが理想を求めて現実に立ち向かうのはどこの世界も変わりません。

これも、そんな大海の中の一つのさざめきのような物語です。
誤字、脱字、わかりにくい描写や比喩表現など、おや？ と感じ
られた部分がありましたら指摘して頂けると幸いです。

痛いほどに冷たい雨が降っていた。

そのおかげで人目はなく、家から出る者がいないのは幸いであった。誰にも見られたくない。

長い付き合いだった手枷は、足元に倒れる男の持っていた鍵束で外してくれた。

家から運び出した荷物を手早く荷馬車に積み込むと、彼は長年世話をさせられてきた馬に囁きかけた。

「逃げ切れると思うかい？」

「ぶるる」と馬は嘶いた。彼が喋ると必ず相槌を打ってくれる。

「……行こうか」

彼が軽く手綱を打つと、ゆっくりと木の車輪が回り始めた。

草原の出会い

緑の海。……と言つたつだ。実際の海を見たことはない。見渡す限り、視界には草原がどこまでも広がつていて。肌を焼く日差しは暑いくらいだが、風がなんとも心地よく吹いている。秋は近いらしい。

緑色をかき分けた日の前の一本道は朝からずつと変わらないが、景色の中で太陽だけが段々と低くなつてきていた。自分がいなくなつたことで、今この村は大騒ぎだつ。だが、もうそんなことはどうでもいい。あんな村に縛られることがなくなり、ようやく自分は自由を手に入れたのだから。ふと、空を仰ぐ。

青と白だけの空を、こんなにも美しく綺麗だと感じたのはいつ振りだらうか。

その天井が赤みを帯び、太陽が地平の境に沈んでからはあつとう間に気温が下がり始めた。

そろそろ夜の準備をしたほうがいいのだろう。なにぶん旅は不慣れなのだ。漠然とした不安があつてなかなか気楽にはなれない。

こんな時にはどうする、程度の知識があるだけで、具体的な経験というものはまったくない。

「冷えこんできたな……」

苦労してようやく火がついたころには、もう空と雲の判別が怪しいくらいにまで暗くなつてしまつていた。

「これだけだもんな……。さすがに心もとないよなあ」

一頭の馬が余裕を持つて引ける大きさの荷馬車。これにカルルのすべての持ち物が積み込まれている。

干した肉とライ麦の黒パンを齧つて腹を満すと、カルルは毛布を掴んで荷台に上がり、寝転がつて星空と向きあつた。

「綺麗だ……」

それ以上の言葉はなく、そういうえばと体を半分起こした。

「火、大丈夫かな。離れてるから燃え移りはしないと思うけど……」

大丈夫だよね」

焚火の火は獣除けになると聞いたことがある。薪はこの草原では貴重だが、なるべく火は絶やさないほうがいいだろう。

また横になつて目を閉じた。すると耳が冴えるのか、風の音も普段より聞き分けられるような気がした。

「…………？」

今のは何の音だ？

風の音にまぎれて一瞬、何かを感じた。音ではなかつたのかもしない。

再び体を起こし、月明かりしかない薄暗い草原を見渡した。

「…………氣のせい、かな」

結局何も見つけられず、やがて睡魔に負けてカルルは深い眠りに就いた。

「…………？」

今のはなんだろうか。

さつきも同じようなことがあつた気がする。

だが、確かに今しがた、獣の鳴き声のような……。

強く砂利を踏む足音。

次いで、獣の悲鳴。

「…………？」

カルルは跳ね起き、周りを見た。

誰かが、誰かの背中が見える。暗くてよく見えないが、何をしているのかはすぐにわかつた。

ようやく目が暗闇に慣れてくると、三頭の狼がそこにいた。頭を低くし、唸り声をあげてその人物を遠巻きに威嚇している。

自分なら早々に腰が抜けてしまう状況なのだが、その後姿の人物は臆することなく凜と拳を構えていた。怖くはないのだろうか。

そして、あつという間もなく一頭の狼が飛び掛つて と思つた時には、すでに引いていた拳でその鼻先を迎え撃つていた。

すごい。

思わず見惚れていた。

しかし次の瞬間に別の狼が襲い掛かり、その者の太ももに歓牙を喰いこませた。

「 つ

好機とばかりにもう一頭も続き、わき腹にぶらさがるように食らいつく。

悲痛な声に我に返ったカルルは、何か武器になりそうなものはと荷台を見渡し、それを見つけた。

長剣。

護身にとカルルが前の家から持ち出したそれ。未だろくに素振りすらしたことがなかつた。

……だからと言つて、いざ実戦となるとこんなにも重く感じられるのだろうか。

これを持つて野生の狼に挑み、その毛皮を切り裂き、肉を断つ。怯えているのが自分でもよくわかる。

怖い。狼は怖い。そんなのと命を懸けて戦うのはもつと怖い。自分はなんと臆病なのだ。このままでは……。

「 つ……

その結果にこそ、カルルは一番恐怖を覚えた。

「 ……う、……わあああああああつ……」

暗闇で鈍く光る長剣を握り締め、荷台を飛び下り、地面を蹴つた。そしてすぐにその瞬間は訪れた。

突然の雄叫びに狼はカルルの存在に気づいたが、獸の性が簡単に咬みついた頸を離そとはしなかつた。獸の黄色い目がぎょろりと彼を睨み付けるが、それに怯むほどの思考の余裕はもう残つてい

ない。

たとえ剣としては使えなくても……！

ドゴツ、というどちらかといえば打撃のそれに近い音のあと、足に咬みついていた狼が白目をむいて倒れた。

まさか本当に倒せるとは、とカルルが驚いている数秒の隙にもう一頭の狼は離れてこちらの様子を伺っていた。

「……っ、君……」

「え？」

よく通る、澄んだ声だった。それ以上の感想を述べることに意味はなく、狼に目を向けたまま返事をした。

「だ……大丈夫ですか？」

大丈夫なわけがないだろう、とわかつていたがそう言つしかなかつた。

カルルから詰めれば一秒か、狼からなら一瞬で詰められるであろう間合い。

不意打ちならばともかく、まともにやりあつて勝てる可能性などない。

「くそ……」

「剣を……」

「え？」

「剣を。私に」

その騎士はいつの間に隣に立っていたのだろう。

ちょうどその時、すうと月の光が雲の隙間から闇の中へと注いだ。

その美しさに子供のころに見た天使が光の中から降りてくる絵を思い出す。

淡い月光に映える長い金色の髪。短く切り詰められた甲冑は傷こそ少ないが使い込まれた歴戦の貫禄がある。そしてその凜とした翡翠色の双眸。……美しい横顔だった。

思わず息を呑んだカルルは女性の言葉を忘れてしまっていた。

「剣を。私にまかせてくれ。きっとあれを倒して見せよう」

我に返ったカルルは狼に注意をむけたまま慎重に剣を渡した。

まともに使われたことなどない真新しい剣を見つめて、一言。

「少年。逃げることを恐れた臆病者のことを、人は英雄と呼ぶのだ」

その時、弾けるように鋭く 狼が飛び上がった。

一瞬の出来事だった。

薄いマントを翻らせ、まるで舞踏でも踏むかのように騎士はそれを真つ二つに斬り伏せていた。

「……私は成り損ねたがな」

「うむ、美味しい」

さつきの貫録はどこへや。」

妙齡の女性特有の愛嬌に満ちた、至福の表情でそう感想を述べると騎士はまたひと口と狼の肉を頬張った。

聞けば名はアカシアと言つそうで、仕留めた狼の肉をたき火で炙つては口へと運ぶ彼女からはなんとも旅の経験が伺える。

「しかし危なかつた。陽が落ちて草原をさまよつていると、遠くに火の光を見つけてな。私がたどりつく前に火は消されてしまつたのだが、どうも獸の気配を感じたのだ。放つておくわけにもいかず、というわけだな。君が目を覚ましたのはそれからだ」

どうやら自分が寝ている間に狼に襲われかけていたらし。それを彼女が助けてくれたということだそうだ。

「本当にありがとうございます。それと……、すいません」

「？ どうしてカルが謝る

「……もつと、……」

思い返すと情けなくて声がすばんだ。

「ん？ なんだ」

「もつと早く僕が出ていれば……アカシアさんは怪我をせずに済んだはずです……」

するとアカシアはふつと鼻から音を出し、水袋からひと口飲んで穏やかな口調で言った。

「カルのせいではない。それに君は私の手当をしてくれた。それで十分だ」

小さな鎧の隙間から服を捲し上げるとわき腹が見えた。カルルの着替えを裂いた布が巻かれており、手当をした時の柔らかい感触が脳裏に甦ったカルルは気恥ずかしくなつて目を逸らした。

「ん。どうかしたのか？」

「い、いえ……なんでもないです」

「ふむ……。 カル」

「は、はい」

「君は今、いくつだ?」

「へ?」

「年はいくつなのかと聞いている」

「年……は、十七です」

「私と三つしか変わらないな。君は敬語で話すのに慣れているようだが、もっと堂々としたらどうだ?」

「……そう、ですよね……。気を付けます……」

慣れているのではなく、今までそれしか出来なかつた。だがしかしそれを彼女に言つても仕方がない。なにより自分について詮索を受けたくないのだ。

「まあ好きにすればいいさ。といひで」

「はい」

「私も荷台で寝ようと思つんだが……構わないかな?」

豪快な欠伸だつた。せめて手で口を覆うくらい、と言つても恐らく無駄なのだろう。

「え……ええ」

「ありがとう。では、話の続きをまた明日な。おやすみ」

一方的に話を切ると騎士は荷台によじ登つておもむろに甲冑を脱ぎ捨て、寝転がるとすぐに静かになつた。

「……ふう……むにゅ」

悪い人ではないのだろう。……たぶん。

ぱちぱちと燃えるたき火に残つていた木切れをすべてくべ、カルルも眠ることにした。

「でもなあ……」

それがいくら小さな荷馬車で、多少の荷物が積んであるとはいえ、足を伸ばして寝るのには十分な余裕がある。

だが、そこに一人ともなれば話は別だ。

猫のように身を丸めて横になっているアカシアの隣には、カルルが寝るにはなんとも微妙な隙間が空けてあるのか、……それとも空いているだけなのか。

後者だった場合を考慮すると、ここに無理やり体を押し込むのは流石に遠慮するべきであろう。

「……寝るんじゃないのか？」

不意に目だけ開いてそう言われた。

「……もつと寄ってくださいよ」

「そうか、たしかに冷え込むからな。君がそう言つのならば」「いや、ちょっと、逆です、そつちに詰めてくれって意味です」

「ああ、そういうことか。……ん、これでいいか？」

「はい。……それで、アカシアさん」

「なんだ？」

「さつきあなたが話の続きを明日ひて……。でも、明日すぐに出発するつもりなんですけど」

「ああ、私もそのつもりだ」

「いえ、ですから。いつ、その話をするんです？」

「？ 道中でゆっくりと話せばいいと思うのだが」

「……ああ、アカシアさんも行先は都の方角でしたか」

「なに？」

「え？」

「王都に行くのか？ カルは」

「え、ええ」

「……まいつたな」

のそりと起き上がるとアカシアは頭を抱えた。

「あの……僕が王都に行くとまざいんでしょ？ つか

「いや。カルではない。私が……。ふむ、やはり今話しかつた

ほうが良さそうだな」

話し合い、と言いながらもアカシアの口調と眼つきには穏やかではない色がこもっていた。

一体、どれほどの敵を切り伏せてきたのだろう。

ずっと生き延びるために必死だつた。

自分を殺しに来る敵が、ただただ怖かつた。

名も知らぬ相手に剣を振り下ろすうち、いつしか『戦神アカシア』などと呼ばれるようになつていた。

それが使命と信じ込んで、命を奪うことにする躊躇しなくなつたのはいつからだろう。

……半月ほど前、ある国で権力の頂点だつた国王が戦死し、その後を王子が継ぐことになつた。

まだ若い王子は腹に一物を抱えた老人の言葉を鵜呑みにしてしまって、その国の英雄として讃えられていた者を処分することに決めてしまつた。

それ自体はあまり珍しい話ではない。

未熟な跡継ぎが王たる資質を養うために失敗を重ねるのは自然なことだ。

だから、王宮に仕える親友にそれを告げられた時も大して驚きはしなかつた。ああ、やはりそうなつたのか、と。予感はしていた。今の王に弁明の声は届かない。

だが、こちらとてそんな理不尽に殺されるつもりも毛頭ない。ならば逃げよう。自分にはこの生き方しかできない。

幸か不幸か、物心ついた時には家族はどこにも居なかつた。しかし、自分が姿をくらましてその帮助を問われないよう、忠誠を誓つてくれた部下を裏切る必要があつた。

あの、何事にも生真面目だった部下。

自分の娘ほどの年齢の相手に、彼は気を失つまで殴られることも厭わなかつた。

何度も殴打され、痛みを叫ぶのは部下のはずなのに、自分ばかり

が泣いていた。

そして、夜中に門兵が全員居眠りをしている隙を突いて門をくぐつた。

寝言と言ひはる彼らに独り言の別れと礼を残し、夜の草原へと馬を走らせた。

死神とまで謳われた英雄が、死刑を前にして逃亡。

後ろ指などいくら刺されても痛くも痒くもないが、同じ釜の飯を食つた連中との別れはやはり辛かつた。

逃走劇は成功したように見えた。自分自身、安心して馬に気を遣う程度の余裕も持ち始めていた。

だが、若い王は早く実績を作りたかったのか、裏切り者の処分に特に力を入れて動いたらしい。

追手は予想よりもずっと早く追いつき、馬を射止められてしまい応戦を余儀なくされた。

戦いには勝利したものの、自分は剣と馬を失い、追手の者も死ぬ間際に愛馬を道連れにした。

結局、自分の足で草原を行くしかなくなつたのである。捕らえられれば裁判もなく処刑されるだろう。あつけないほどに。生き残るには王国が滅びるか、追手の及ばない他の勢力圏まで逃げ切るしかない。

「アカシアさん？ どうしたんですか、急に黙つて……」

「……カルル」

「はい？」

「頼む。どうしても私は王都から早く離れたいのだ。そのためにはこの馬を貸して欲しい」

これほど必死に人にものを頼んだのはきっと初めてだ。だが、言葉を濁すカルルに胸の奥が重くなる。

「……頼む」

「……」

そう簡単に頷いてくれるとは思つていなかつた。だからといつて

手荒な真似をするのは本当に最後の最後にしたい。

そんなことを考えているうちに、ふと疑問が浮かんだ。

逆に、どうして彼は王都を目指すのだろう。理由もなく人の頼みを無下にするような性格には見えない。よほどの目的があるのだろうか。

「……なあ、カル。 そういえば聞いていなかつたが、君はどうして王都に？」

「……」
より一層カルルの表情が強張つた。それは何か、彼の触れられたくないモノに触れてしまった反応。

「カル？」

「……僕は……」

俯いて服の裾をぎゅっと握り、消え入りそうな声でカルルは言いかけた。だが次第に顔が青ざめ、ふつと。

「カルルっ！」

少年は気を失つて倒れてしまった。

くさい。……嫌いなにおいがする。

朝起きて一番初めに抱いた感情は『不快』。昨日も、今日も、明日もずっと。

「いつまで寝てやがるつー。そつぞと羊の世話をしろガキー。」
なにも言い返さない。言い返せないんじゃない。無駄なことをしないだけだ。

「つたく……使えねえ奴隸だ。たまつたもんじゃねえよ」

愚痴を溢しながら男が馬小屋から消えると、カルルはもそもそと起き上がりつて背筋を伸ばした。

そして、ため息。

家畜の糞尿の臭いが染み付いた寝床が、今度は仕事場になる。仕事場と言つても、給金を貰つて稼いでいるわけではない。馬車馬のよつに使われ、怒鳴られ、腹を蹴られ、いつしか夜になつてゐる。

好きでこんなところに居るわけではない。この村は人さらにに遭つた子供が連れてこられ、様々な用途の奴隸として取引されてから使役される。

そして自分と同じような境遇の者は皆、目が死んでいる。最初はなんとか脱出しようと頑張るのだが、口数が減り、次第に表情が消えていき、瞳から光が失われて虚ろな目をするようになつていく。自我を失つて本当に家畜と同じになる者。悲観して泣きながら体中を噛んで死のうとする者。

今では見ただけで、その子供があとどれくらいで諦めるかがわかるようになつっていた。

誘拐されて七年も生き長らえた奴隸は初めてだと、誰かが話しているのを聞いた。

きっと、自分は運が良かつたのだ。

すぐ嫌なことをされても、その気持ちを和らげてくれる『抛り所』が自分にはあった。

それのおかげでどんなに辛くても歯を食いしばることが出来た。このオカリナを胸に抱くだけで、思い出が嫌なものをひと時だけ忘れさせてくれる。

吹くと持っているのが知られるから、毎晩指だけ動かしたりして思い出に浸つた。

名前も知らない少女の笑顔。

お互に吹きあつては笑いあつた記憶。

それだけがカルルを認めてくれた。どんなに軽蔑されても、それがあつたから聞き流すことができた。

その夜は珍しく、酒に酔つた家の主人が鼻歌を歌いながら馬小屋にやつってきた。

れつが悪く言つてはいることは半分ほどしか理解できなかつたが、どうやらこの家の奴隸は長持ちだから買い替える金がかからなくて羨ましいな、と誰かに言われたそうだ。それと酒の酔いも相まってか「褒めてやる」などとことらしかつた。

……なんとくだらない。

最初はあまりの馬鹿馬鹿しさに、呆気に取られて舌の回らない男の話を聞いていた。

だが、ふと気づく。そして短い葛藤のあとに覚悟を決めた。

カルルは立ち上がると両手を繋ぐ枷の鎖を男の首に巻きつけ、交差させながら思い切り締め上げた。男の反応は鈍く、思つてもみなかつたほどに非力だつた。

ろくに体を動かすことがなく、よく肥えた首の肉に鎧を擦りつけながら鎖が深く巻き付く。

「あ……やめる、やめ……おつ……やめえあ」

あのふんぞり返つて大きく見えていた奴が、実際は自分よりチビの禿げ頭でしかなかつた。

こんな奴に……つー！

自分の両手首を背負い込み、肩越しに力任せに引き上げる。

カルルが本気を出しきるまでの間、気持ちの悪い静寂があった。

そして、蚊の鳴くような断末魔を耳元で聞くと、腐った木の枝が折れるような感触を得たのだった。

「 つー」

勢い良く体を起こし、隣にいた誰かに掴みかかっていた。

「 はあつ…………はあつ…………！」

ようやく自分が寝惚けていたことを理解してアカシアの体から手を離した。抜きかけた短剣を收めると彼女は言つた。

「 かなり、うなされていたぞ。怖い夢を見たんだな」

「 夢…………？…………いや、…………夢じやない…………」

「 どうした？」

「 ……」

忘れる事とはできるのだろうか。

今までに受けた苦痛はそのうちに薄れていいくだろう。だが、一線を越えた事実は決して消えることはなく、記憶の付箋として残り続ける。

「 大丈夫だ。何も怖いことなどないぞ」

頭を優しく撫でられた。

「 ところで。…………君に聞きたいことがある」

ずい、と顔を寄せられて思わず身構える。落ち着いてきた呼吸が別の意味で乱れそうになる。

「 ハロッサ、という町を知つていいか？」

「 ……」

知らないわけがない。七年もの苦痛な歳月をそこで過ごしたのだから。

どんな顔をすればいいのか、そして自分は今どんな顔をしていたのか。悲しそうなアカシアの表情に申し訳ない気持ちが溢れてくる。

「……そうか。やはり、そういうことか」

推測が正しかつた、とアカシアは声を落とす。

「君が氣を失つて、介抱しようとして見つけてしまつた。その手首の跡は……見覚えがある」

「……」

自分の手首を田でなぞつた。外してから間もない鉄の枷の跡はまだはつきりと焼き付いたように赤く痣として残つてゐる。

「君が都へ急ぐ状況も理解した。……だからこそ、頼む。君に降りかかる火の粉は私がすべて払う。だから」

「わかりました」

「……ん？」

「いいですよ。もう、おまかせします」

「カルル……？」

アカシアに背を向け、荷馬車から降りて夜の草原のじじまの向うを見据える。

ハロッサから逃げ出したあたりから、薄々わかつてゐた。

都に帰つたところで、思い出を取り返すことなど出来はしない。

ましてや、あの時の少女との再開など夢に妄想もいいところ。

自分が木の枝で叩かれていた間に、少女は様々な経験をして喜怒哀楽を育み、素敵な女性になつたのだろう。

あのひと時の幸福感を与えてくれた笑顔すら、実はもうおぼろげにしか思い出せない。

「……？」

オカリナの音色がして、ふり返つた。

粗末な荷馬車の上、月明かりに照らされながらオカリナを吹いている者がいる。

それは彼女しかありえないのだが……そうではない、この吹き方を自分は知つてゐるのだ。

いや、それ以前にこの旋律は……。

一息分ほどの演奏が終わると、彼女はオカリナを唇から離して咳いた。

「……不思議な感覚だ。すっかり忘れていたと思っていたのに、指が憶えている。耳が思い出しても、また次の音が頭に浮かんでくる。とても心地が良い」

巧いか下手かではない。

その短い演奏にカルルは涙が溢れていた。

「ああ、……すまんな、話の途中に。懐かしくてつい、手に取つてしまつた。って、おい、どうした？」

鼻声になるのが嫌で、黙つて首を横に振る。

「大事な物だつたのか……。悪かつた」

「違うんです、そうじやない……」

「では、どうしたと言つんだ？ なぜ泣いている」

「あなたは……その曲をどこで？」

「曲？ あ、ああ。今のはな？ 私が幼いころに、ある少年から教わつた曲なんだ」

ぐつ、と胸が詰まる。

そんなまさか。

「変な話をするが……私は戦災孤児でな。両親ともに失つて、王都の孤児院で暮らしていたんだ。いつも一人で過ぐしているような子供だつたよ。同じくらいの年の子ともあまり遊ばないで、いつも形見のオカリナを吹いていたんだ」

戦災孤児。

王都の孤児院。

カルルにも懐かしい言葉だつた。

夜中にトイレに起き出して、部屋に戻る途中でさらわれるまでは、

カルルもそこで暮らしていた記憶がある。

「それで、私のことをじつと見つめている子供がいたんだ。新しく入ってきた子で、話を聞くとその子も私と似たような境遇だつた」

その時はきっと、さぞかしモノ欲しそうな目で彼女のことを見ていたのだろう。オカリナを胸に抱えて警戒された覚えがある。

「聞けばその子も母親がよくオカリナを吹いてくれたらしい。その時にあの子から教わった子守唄、それがいま、私が吹いた曲なんだ」「……その子とは、それから……？」

「ん、ああ……居なくなつたんだ。ある日突然、ぱつたりと。迷子では……ないだろうな」

「じゃあ、その子の名前は」

「いや……。思えばなぜ聞かなかつたのだろうか。あんなに仲良く……していたのに」

手に持つた白い陶製のオカリナを見つめ、アカシアは思い返した。そうだ、あの時は貸したまま別れて、それであの子は居なくなつてしまつた。あの時は形見を盗まれたと大泣きしたが……。

そういえばあのオカリナによく似ているなと思い、何となくそれを裏返してみた。

すると、見覚えのある一対の剣の紋章に目を奪われた。
とある貴族が戦での功労に剣の誉れとして王から授かつた名誉ある家紋だ。

「…………え？」

それを見た瞬間、走馬灯のように記憶の断片が次々と甦つた。
転んで危うく割つてしまいかけた時の傷や、それを隠そうと不器用な母が塗つてくれた、少し色の違う白色。

そして確信した。

「これは……」

間違いない。

これはあの時に失くしたオカリナだ。

「それをあの子に返すことだけを考えて、今日までなんとか生きてこれました」

「カルル……」

信じられないという顔でこちらを見つめる騎士は、あの立派な出

で立ちを忘れてしまったほどに幼く見えた。その姿に当時の記憶が重なり、再び涙が滲んできた。

「それはお返します。何度助けてもらつたかわからないけど……

もう、無くても大丈夫だから」

「そうか……君はあの時の……あの時の……そつなんだな？」

頷く。

言葉はなかつた。口を開くよりも早く抱きしめられ、言葉が言葉にならなかつた。

肩の後ろから声がする。目の前には暗い草原が広がつてゐるだけ。何も見えないが、とても温かく心が安らぐ声だつた。

「良かつた……生きていた……生きてた……」

「……死んだと思つてましたか」

そう言つと、アカシアは肩を掴んで向き合つ姿勢で言つた。

「ばか、あんな小さな子供が急にいなくなつたりしたら……、そう思つてしまつだろう……、ばか」

「そんなんに泣かれると……僕も困ります」

「……感情に我慢はしない主義なんでな」

鼻をすすりながら開き直つても様にはならない、とは言わずにおいた。

「そうか……うん、良かつた。よし、寝ようか」

「え？」

背を向けてひとりで荷馬車にもどると、アカシアは半分だけふり向いてバツの悪そうな顔で返事をしてきた。

「いやはやなんというか……恥ずかしくてな。人前で泣いたことなんて本当に孤児院以来なのだ。寝て、今のは忘れてくれるとありがたい」

思つたことをすぐに口に出す と言えばまあアレだが、ここまで素直に感情を晒す人も珍しいのではないだろうか。案外、中身は昔のままなのかもしれない。

「なんだか想像してたのと違つなあ……」

しかし、思い出は思い出のまま美しくあればいいではないか。運命は数奇なものと言つ。その一端と納得すればそれまでのことが、親を失つたこと。誘拐されて売り飛ばされたこと。人を……殺めたこと。

ならば思い出の少女が狼を切り伏せる騎士になつていたくらい、なんということはない。

と、納得することにした。

「何の話だ？」

「いえ。なんでも。それより星が……綺麗ですよ」

「ん？　　ああ、そうだな。まるで降つてくるようだ。すこし怖いくらいに」

「…………」

「くあ……おやすみ」

「おやすみなさい」

しかし残念なことにカルルにまどろみが訪れたころにはすでに空は白み始めていて、疲れもろくに取れていないと不機嫌に唸るアカシアには寝惚けて顔に蹴りを入れられた。

気まずそうに荷台で剣の手入れをする騎士という新しい荷物を乗せた荷馬車は向きを反転させ、新しい旅にカルルは手綱を打つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6273w/>

草原の歌に花言葉を

2011年10月10日03時20分発行